

NHKの大河ドラマ「いだてん」は明治が生んだ日本人初の五輪マラソン走者、金栗四三の驚きと戸惑いを通し「未知の海外世界」と日本の遭遇を描いて面白い。

時を経て昭和の東京大会でも、日本人は多様な国、民族が一堂に会する競技に初めて見入った。こんな種目もあつたのか、すごい、である。出合うものが新鮮だった。

メディアに動員され、多くの作家らが新聞や雑誌に観戦記、対談を残した。「1964年の東京オリンピック——『世紀の祭典』はいかに書か



玉木 研二

ka-ron

火論

未知との遭遇

れ、語られたか」（石井正己編、河出書房新社）には34人の分が集められている。

重量挙げ選手の奇妙な表情や仕草に柴田錬三郎は「無我無想に至る剣客の修業」を見いだした。瞬時に明暗分かれる陸上百将を「居合抜き」に例えたのは安岡章太郎だ。

当然、批判や皮肉もある。松本清張は大会前に「なんの感興もない」と書き、五輪の効用で道路が整備されたなんて「本末転倒」と断じた。た

だ、開会式、閉会式の感動と陶酔感を後に書く。

「戦争中の報道班員のよう

に駆りだされた」遠藤周作は背泳を見て、選手がスタート台から後ろ向きに飛びこんだとき、クビになったという。

大宅壮一、司馬遼太郎、三島由紀夫という、今思えばビツクリするような取り合わせの鼎談も登場する。

東京五輪を敗戦国である日本の敗者復活戦とみる大宅の

提起で、話は「ナショナルリズム」に向かう。

三島は閉会式の光景を挙げて「ワーツと選手が肩を組んで出てきたときは、感動的だった。あそこでナショナルリズムと平和というのが、はじめて具体的な場面で、ドラマチックに構成された」と言い、「日本の知識人がみんなこの問題でうまくいかなかったところですよ。それが、オリンピックでは、ちゃんと実現された」と評価するのだ。

司馬はこう語っている。

「オリンピックでも日の丸が上ったり、あるいはトランジスタで世界的に進出した

りするのは非常にうれしい。が、あまりナショナルリズムとすることを宣伝すると、こわいことになりそうに思う。ナショナルリズムというのは、せいぜい奈良や京都を残しましようとか、そんな程度の観光的な意味にとどめておくほうがよろしいと思うていますわ」

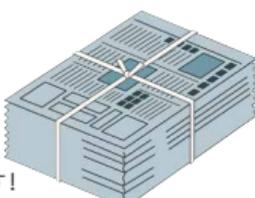
「平成最後の……」という表現にならば「令和初のオリンピック」ということになる2020年東京大会。作家らはどれほど書き語るべき、新鮮な言葉を持つだろう。

(客員編集委員)

環境保全の為のリサイクル

古紙は100%リサイクル可能な資源です。お客様が不要になった新聞はゴミとならないよう回収することが、企業側の責任と考えております。

私たちは、古紙(資源)をリサイクルすることにより資源のムダ遣いを抑え、美しい自然環境を守り、住みやすい循環型社会が形成されるよう少しでもお役に立ちたいと思っております!



読み終えた新聞の回収を行っております。

ご希望の方は最寄りの販売センターへご連絡ください。